



中国がわかるシリーズ 34 王安石の改革(下)

ライフネット生命保険株式会社
代表取締役会長兼 CEO、出口 治明氏

大宰相、王安石は、在職5年で辞職しました。しかし、(大儒、王安石の著した注釈書によって科挙に合格した)実務官僚の大半は、新法に共鳴しており、神宗の在位中は、新法が概ね貫徹され、宋の財政は、回復を見たのです。王安石の新法がいかに優れた政策であったかの何よりの証左でしょう。

旧法には、纏まった政策はなく、1086年、宰相に就任した老齢の司馬光は、旧法党を纏められないまま、7ヶ月で死去しました。王安石と司馬光は、政策面では厳しく対立しましたが、両者とも傑出した文人であり(司馬光の「資治通鑑」は、編年体史書の名著であり、王安石は、唐宋八大家*に数えられる名文の使い手であると同時に大儒として、孔子廟に合祀されました)、お互いに文通を行い、深く尊敬し合っていました。

しかし、2人の後を継いだ新法、旧法のエピゴーネン達は、党派争いに堕していきました。そして、そればかりではなく、内部抗争にも明け暮れるようになり、両派が無益な権力闘争を繰り広げる中で、朝令暮改が相次ぎ、宋の国勢は傾いていったのです(それでも、新法のおかげで改善された財政が、なお、宋の屋台骨を支え続けました)。なお、1076年、呂大鈞が、陝西省藍田で、教化互助を目的とした郷約(郷人が守るべき規約)を作成しました。これは、規約の実行を見守るために、毎月会合を持つ自助的、自立的な優れた仕組みでした。

*: 唐宋八大家: 優れた文章を残した唐の韓愈、柳宗元、宋の蘇洵、蘇軾、蘇轍、王安石、歐陽脩、曾鞏の8人を指します。蘇洵の長子、旧法党の蘇軾(蘇東坡)は、宋代最高の詩人、書家でもあり、東坡肉や杭州の西湖に今も残る蘇堤(白堤は、白居易によるもの。杭州は、2人の著名な文人知事の赴任地でもありました)でも有名です。なお、蘇轍は、実弟です。